

## 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3) 不利を克服するレジリエントな児童生徒

平田 誠一郎

とよなか都市創造研究所 研究員

### <目次>

1. はじめに
2. レジリエントな児童生徒とは
3. 生活規律・非認知能力
4. 学校との関わり
5. 学習状況
6. 授業での工夫
7. まとめ

### 1. はじめに

本章では、SES で不利な状況に置かれているにも関わらず、学力において上位の成績を取っている児童生徒の特徴について分析を行う。これまでの章で述べているように、一般に SES が厳しい児童生徒の学力は低い傾向にあるが、その傾向の中においても高い学力を示す児童生徒は一定の割合で存在する。これらの児童生徒の特徴を見ていくことで、学力格差を緩和する可能性について考えてみたい。

具体的な方法としては、全国学力・学習状況調査の国語および算数・数学の成績と質問紙へ

の回答を組み合わせ集計していく。前章においてはレジリエントな学校<sup>1</sup>について取り上げたが、本章ではレジリエントな児童生徒個人の意識や授業での工夫などに着目するものである。

### 2. レジリエントな児童生徒とは

分析結果に入る前に、データ分析の前提となるカテゴリーの定義について述べておきたい。文部科学省から委託を受けた共同研究で全国学力・学習状況調査の結果を分析した山田 (2021) は、保護者調査<sup>2</sup>の回答 (家庭の所得、保護者の学歴) に応じて4段階に分けられた家庭

<sup>1</sup> レジリエント (あるいは名詞としてのレジリエンス) の意味については、第4章の脚注において述べられている通りである。心理学を中心に広く注目されている概念であるが、近年では教育、福祉など隣接分野においても見られる。

<sup>2</sup> 全国学力・学習状況調査においては、平成25年度 (2013年度) 以降4年に1回、対象校を抽出しての保護者調査が行われている。

SES<sup>3</sup>を分析に用い、レジリエントな児童生徒の特徴を明らかにした。ここでは4段階の中で最もSESの厳しい層にある保護者の子どものうち、学力調査の成績が上位25%に入るグループをレジリエントという、不利を克服している児童生徒であるとしている。またその児童生徒の特徴として、非認知スキルがSESに関わらず学力を引き上げる可能性のあること、復習を中心とした学習スタイル、土曜日の午後に映像・パーソナルメディアの視聴が多く、知的好奇心を満たす代替的資源としている可能性のあることなどが挙げられている。

本章での分析も山田の研究を参考にしているが、今回の全国学力・学習状況調査のデータには保護者調査が含まれないため、児童質問紙における「蔵書数」の項目によって家庭SESをグループ分けした。蔵書数が「25冊以下」となる回答を選択した児童生徒を特にSESの厳しい層とみなしている。また成績に関しては、学力調査（国語、算数・数学）2科目の平均正答率を個々のサンプルごとに算出し、その正答率が上位25%にあたるグループを成績上位層とした。

そのうえで、蔵書数が25冊以下かつ成績上位25%に当たる者を本章でいうところの「レジリエント」とした。なお対象群として、蔵書数が25冊以下かつ成績上位25%以外のグループである「非レジリエント」、蔵書数が100冊以上かつ成績上位25%のグループである「蔵書多・高成績」を設定している。

以下では基本的に令和5年度（2023年度）の全国学力・学習状況調査の結果を元に分析していくが、必要に応じて令和3年度（2021年度）、令和4年度（2022年度）の結果を用いた経年変化も示していきたい。なお、集計に際しては①「レジリエント」②「非レジリエント」

③「蔵書多・高成績」に加え、④「①～③に該当しないグループ」の4グループと市全体の合計につき、児童質問紙の回答をクロスしている。ただし結果の表示を分かりやすくするため④については記載を省略した。クロス集計では、カイ2乗検定による統計的有意性について、図表タイトルの後に記号を付して示しているが、これについても上記の①～④を含んだ結果の検定である。検定の水準についてはこれまでの章と同様であるが（\*\*\*:0.1%水準、\*\*:1%水準、\*:5%水準、+:10%水準）、概ね有意な結果が得られている。

### 3. 生活規律・非認知能力

はじめに、日々の生活習慣がどの程度規則立てられているかという生活規律と、非認知能力に着目する。「朝食を毎日食べている」という設問に対して、図表5-1・5-2に示したように「している」との回答の割合が小6・中3ともに、非レジリエントがレジリエントを少し下回っており、中3のほうがより差が大きい。

また、非認知能力に関してここでは2問の結果を示すこととする。図表5-3・5-4の「自分には、よいところがあると思う」という設問については、特に小6では「当てはまる」という回答でレジリエントが非レジリエントを15ポイント近く上回っており、両者の差が開いている。中3においてはその差はかなり縮まっている。

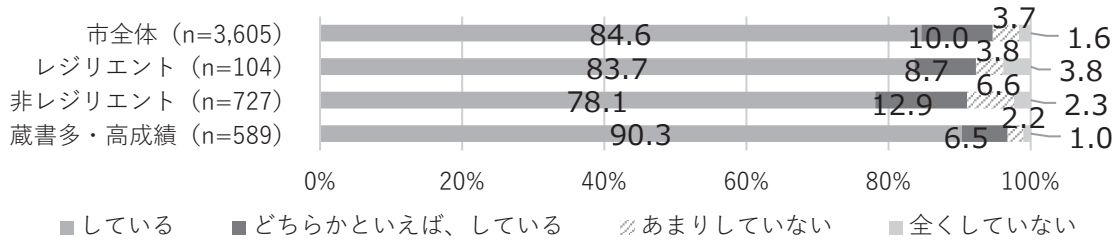
図表5-5・5-6の「将来の夢や目標を持っている」という設問については、小6では「当てはまる」という回答でレジリエントが非レジリエントを約10ポイント上回っているのに対し、中3では非レジリエントがレジリエントを上回る結果となっている。ただし、統計的有意性と

<sup>3</sup> 浜野(2021)を参照。

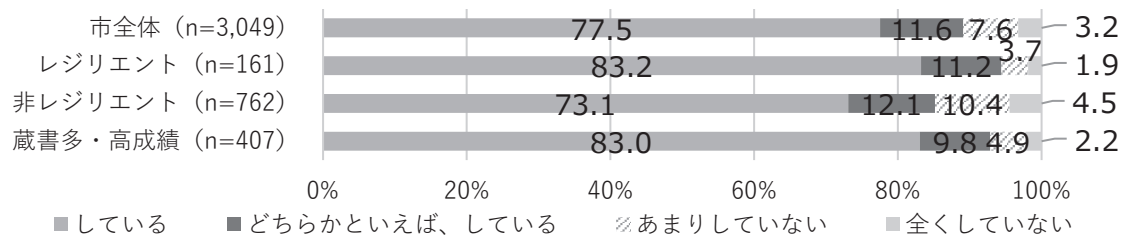
## 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)

しては、他の設問に比べて確かな結果とはなっていない。また、この設問では過去3年間を見

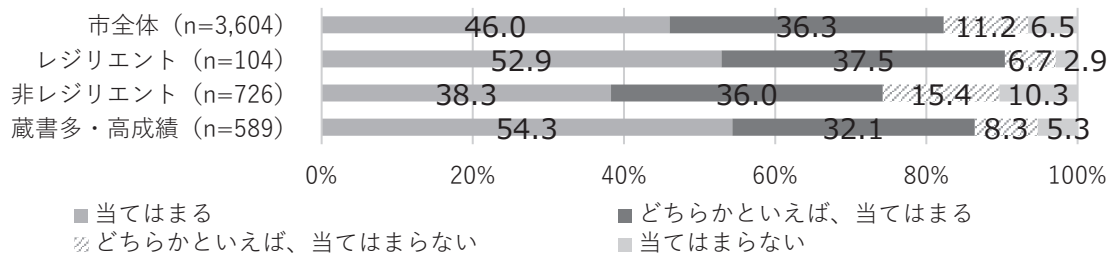
ても小6・中3のいずれも非レジリエントがレジリエントを上回る場合がある。



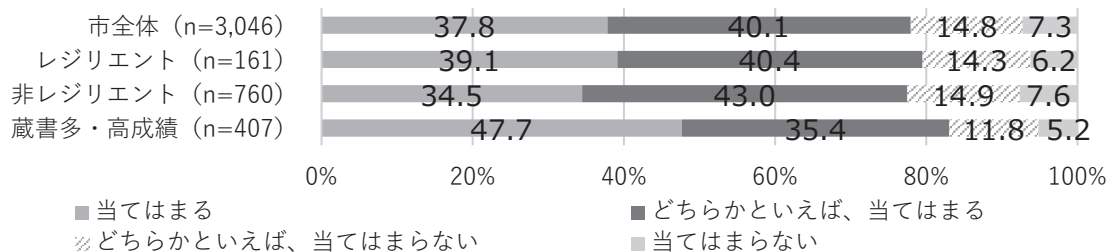
図表5-1 (小6) レジリエンスと「朝食を毎日食べている」のクロス集計\*\*\*



図表5-2 (中3) レジリエンスと「朝食を毎日食べている」のクロス集計\*\*

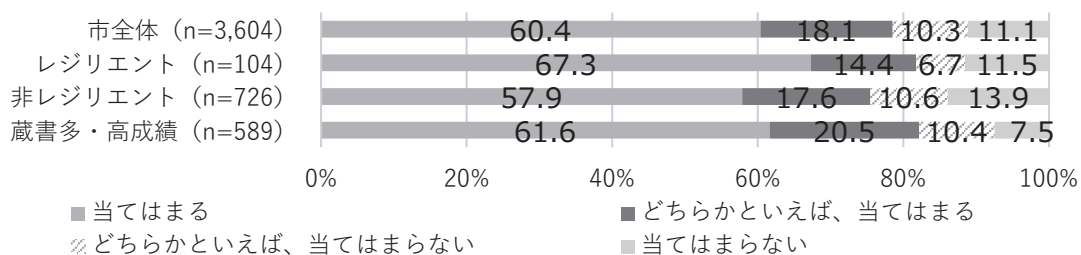


図表5-3 (小6) レジリエンスと「自分には、よいところがあると思う」のクロス集計\*\*\*

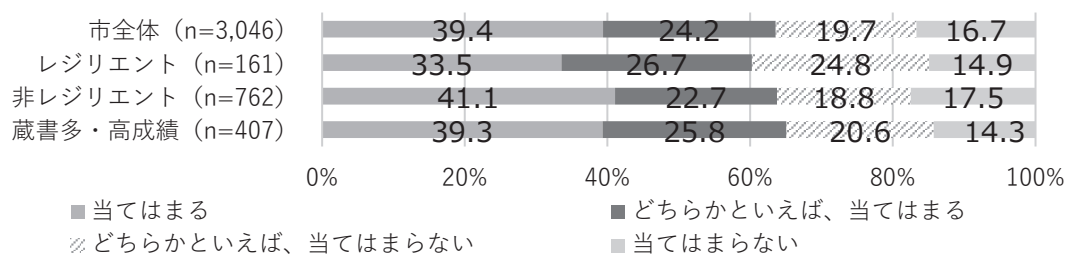


図表5-4 (中3) レジリエンスと「自分には、よいところがあると思う」のクロス集計\*\*

## 調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表5-5 (小6) レジリエンスと「将来の夢や目標を持っている」のクロス集計\*



図表5-6 (中3) レジリエンスと「将来の夢や目標を持っている」のクロス集計

### 4. 学校との関わり

続いて学校との関わりについて見ていく。図表5-7・5-8に示したように「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」という設問について、「当てはまる」と回答する割合が小6ではレジリエントが非レジリエントを10ポイント以上上回っているのに対し、中3ではその割合がほぼ同水準となっている。「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、小6ではレジリエントが非レジリエントを若干上回っており、中3では逆にレジリエントが非レジリエントを若干下回っている。なお、中3についてはグループと回答傾向の関連について統計的有意性が見られなかった。

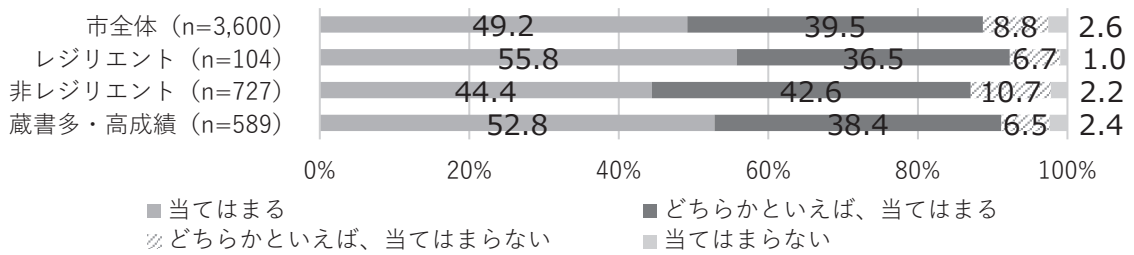
「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う」という設問では、小6・中3ともに「当てはまる」「どちらかといえば、

当てはまる」を合計するとレジリエントは非レジリエントを若干上回っている（図表5-9・5-10）。ただし、グループと回答傾向の関連については両学年とも統計的有意性が見られなかった。

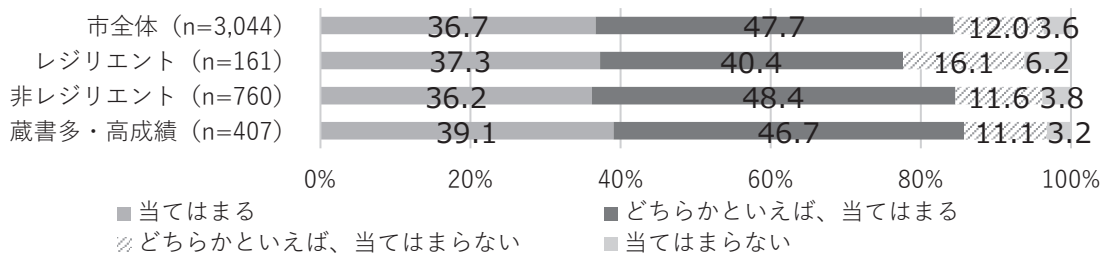
「学校に行くのは楽しいと思う」という設問では、小6で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という回答を合計した割合がレジリエントで非レジリエントを8.5ポイント上回っているが、中3では逆に5.7ポイント下回っている（図表5-11・5-12）。ここでもグループと回答傾向の統計的有意性は見られなかった。

「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という設問では、小6・中3ともに「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という回答を合計した割合でレジリエントが非レジリエントを上回る結果となっている（図表5-13・5-14）。小6に比べ中3ではレジリエントと非レジリエントの差が小さくなっている。

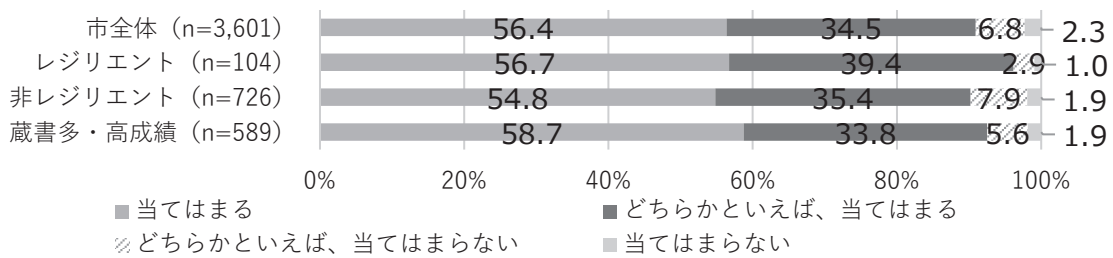
### 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)



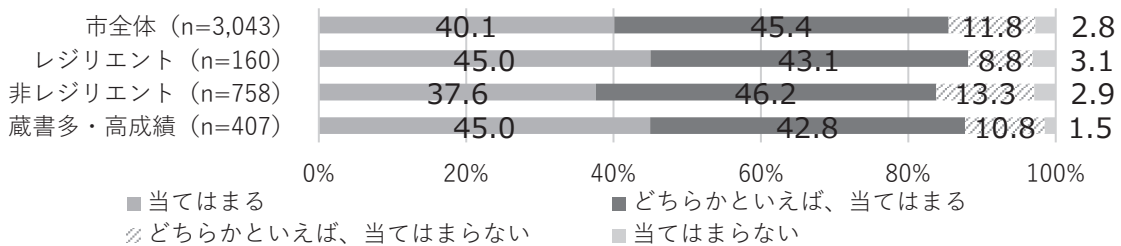
図表5-7 (小6) レジリエンスと「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」のクロス集計\*



図表5-8 (中3) レジリエンスと「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」のクロス集計

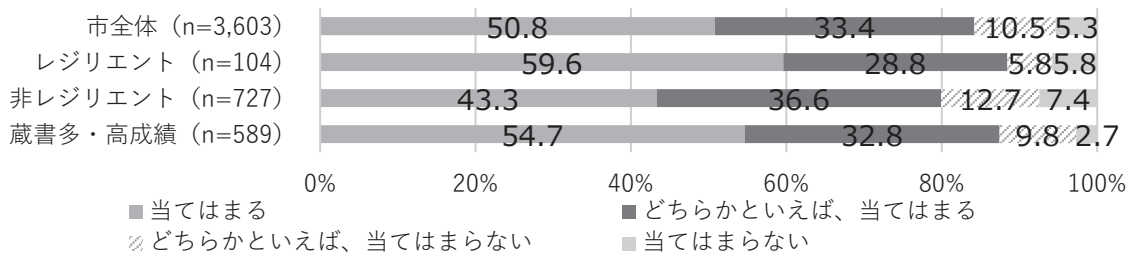


図表5-9 (小6) レジリエンスと「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う」のクロス集計

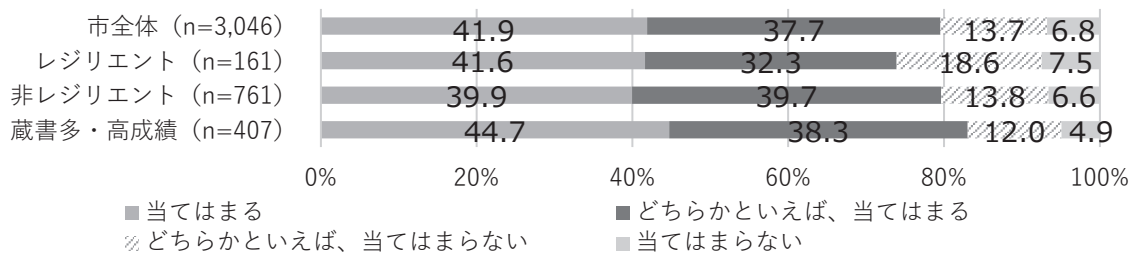


図表5-10 (中3) レジリエンスと「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う」のクロス集計

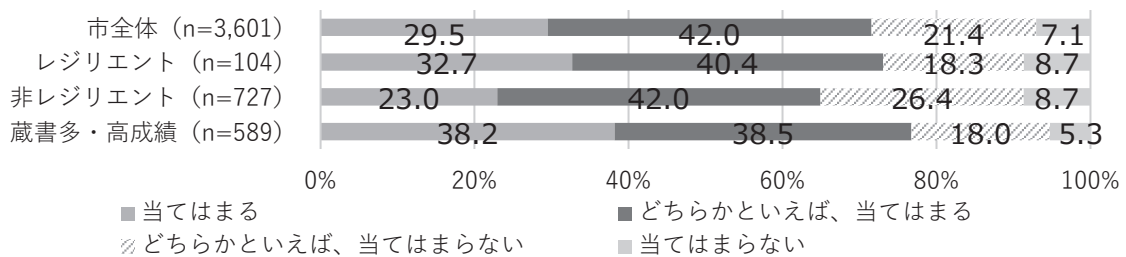
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



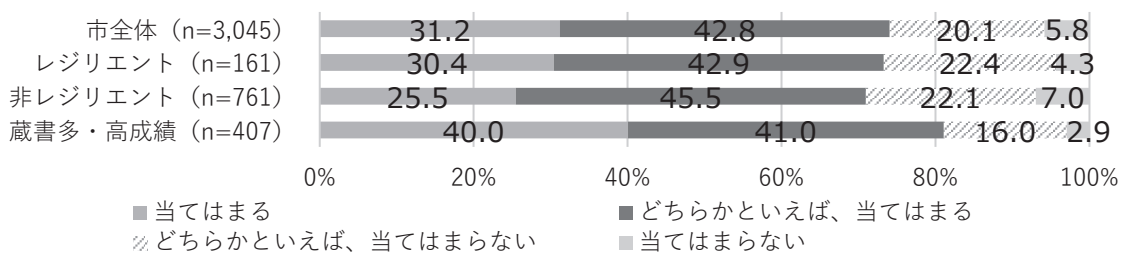
図表5-11 (小6) レジリエンスと「学校に行くのは楽しいと思う」のクロス集計 \*\*\*



図表5-12 (中3) レジリエンスと「学校に行くのは楽しいと思う」のクロス集計



図表5-13 (小6) レジリエンスと「自分と違う意見について考えるのは楽しい」のクロス集計 \*\*\*



図表5-14 (中3) レジリエンスと「自分と違う意見について考えるのは楽しい」のクロス集計 \*\*\*

5. 学習状況

次に、学習の計画性や学習時間について見ていく。学習の計画性に関する設問では、レジリエントと非レジリエントの回答に大きな差が出ている。図表5-15・5-16に示したように「家

で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含みます）」という項目について「よくしている」と回答する割合は、小6で約20ポイント、中3で約17ポイントという差でレジリエントが非レジリエントを上回っている。両者の違いが顕著な項目であり、



## 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)

学習の計画性を高めるよう支援することは、レジリエントと非レジリエントの格差を緩和するためにも重要なポイントと考えられる。

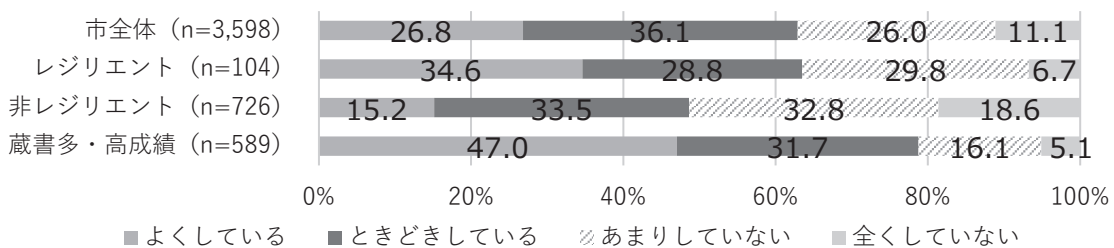
この項目について、令和3年度（2021年度）から令和5年度（2023年度）までの経年変化を図表5-17に示した。「よくしている」「ときどきしている」の合計を記しているが、3年間を通してレジリエントが非レジリエントを上回っているという結果が得られた。

次は学習時間についてである。平日の学習時間（「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含まれます）」という設問）、土曜・日曜の学習時間（「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含まれます）」という設問）をそれぞれ図表5-18・

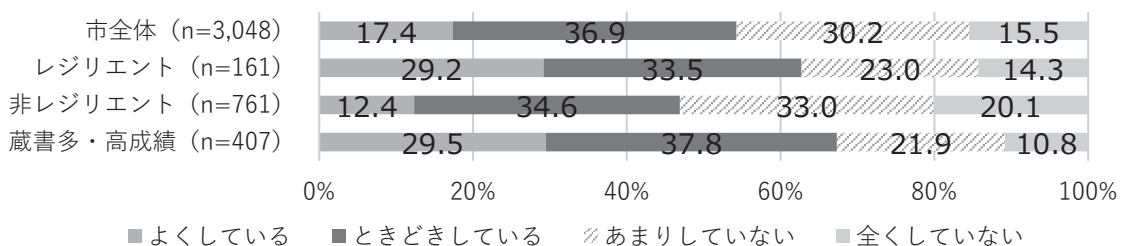
5-19、図表5-20・5-21に示した。いずれにしてもレジリエントの方が非レジリエントに比べ、学習時間が長い傾向がある。

図表5-22・5-23は、「学習塾や家庭教師の先生に教わっていますか（インターネットを通じて教わっている場合も含まれます）」という項目についてまとめたものである。グラフの一番左側の系列が「教わっていない」であり、レジリエントでは非レジリエントに対してその割合が少ない。

次に、ICT機器使用についてである。図表5-24・5-25に示した授業でのICT機器使用頻度に関する設問（「小学校5年生／中学校2年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか）」については、「ほぼ毎日」と答える割合が小6・中3ともに非レジリエントの方が多くなっている。なお、中3ではグループと回答傾向の関連に統計的有意性が見られなかった。教育現場におけるICT機器利用についてはここ数年で推進されているところであるが、現状ではレジリエントな児童生徒の使用頻度は相対的に低いようである。

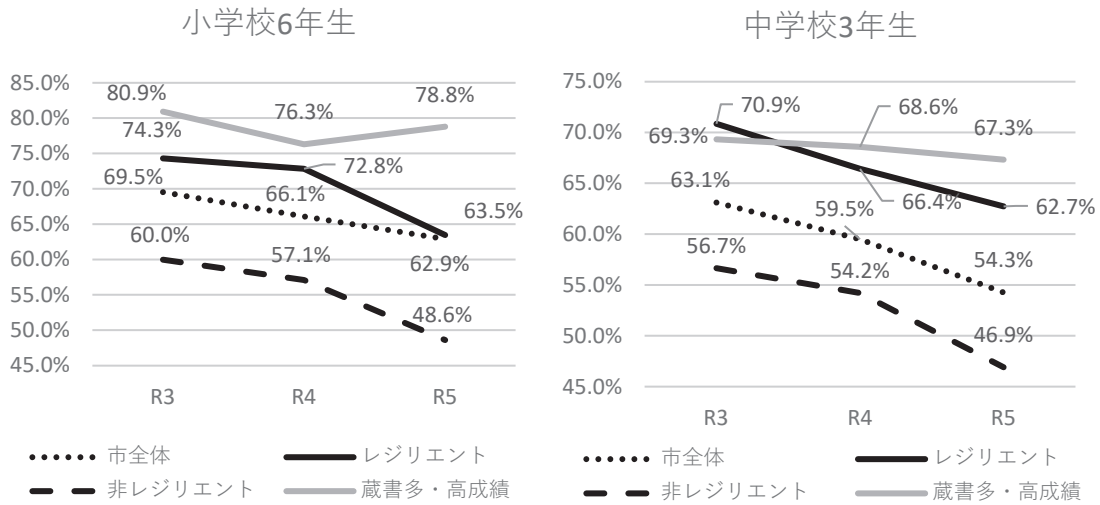


図表5-15 (小6) レジリエンスと「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか (学校の授業の予習や復習を含みます)」のクロス集計 \*\*\*

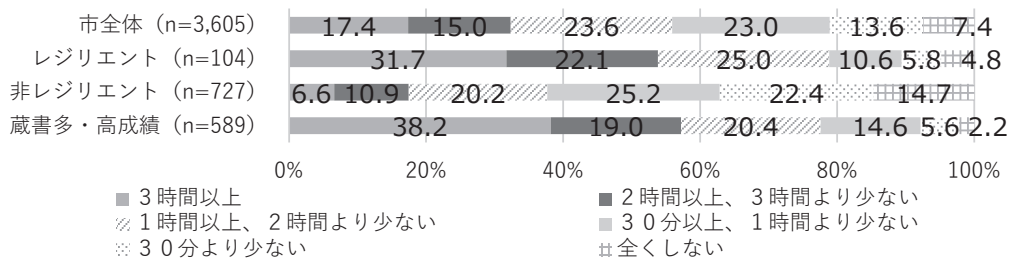


図表5-16 (中3) レジリエンスと「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか (学校の授業の予習や復習を含みます)」のクロス集計 \*\*\*

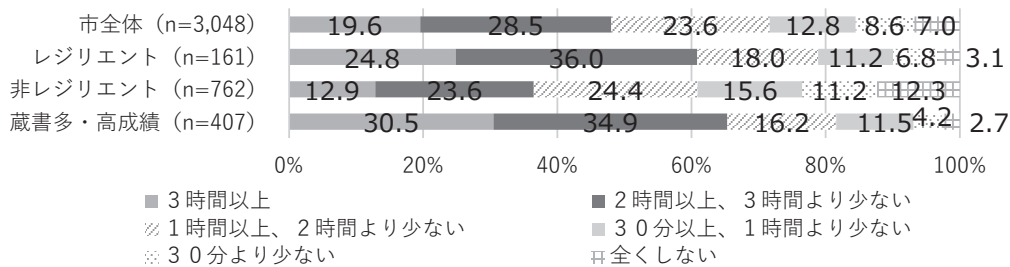
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



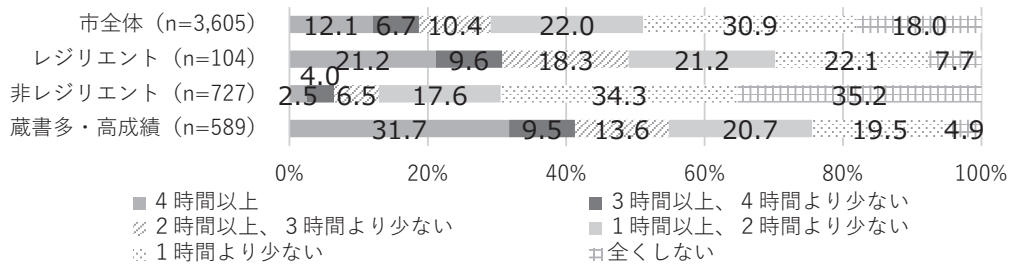
図表5-17 「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含みます）」：「よくしている」「ときどきしている」の合計の経年変化



図表5-18 (小6) レジリエンスと「平日学習時間」のクロス集計\*\*\*



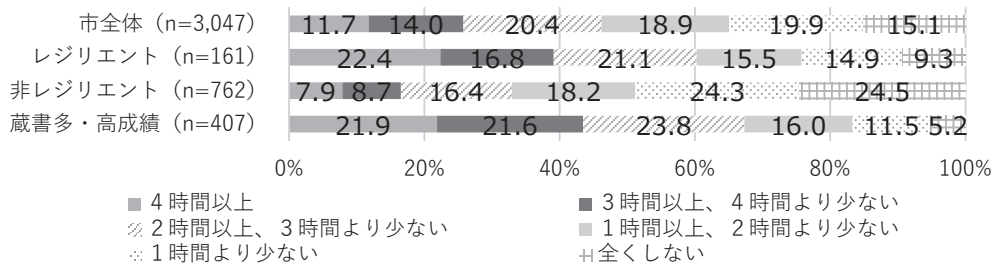
図表5-19 (中3) レジリエンスと「平日学習時間」のクロス集計\*\*\*



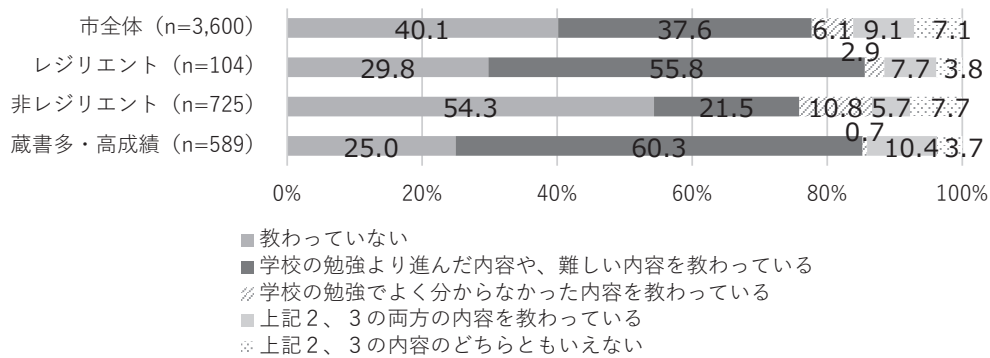
図表5-20 (小6) レジリエンスと「土日学習時間」のクロス集計\*\*\*



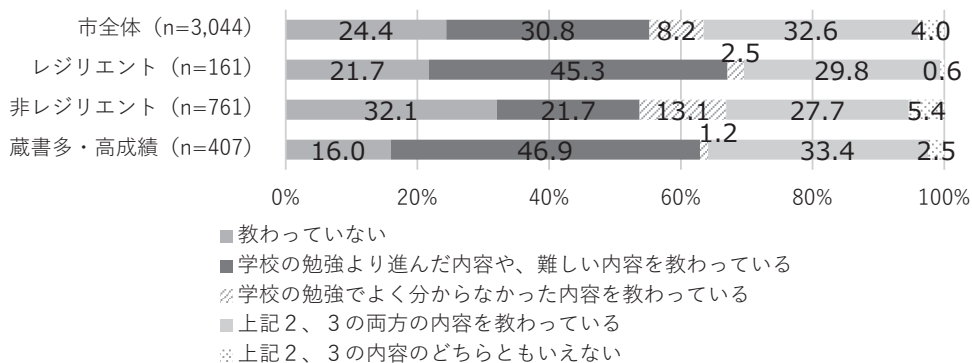
### 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)



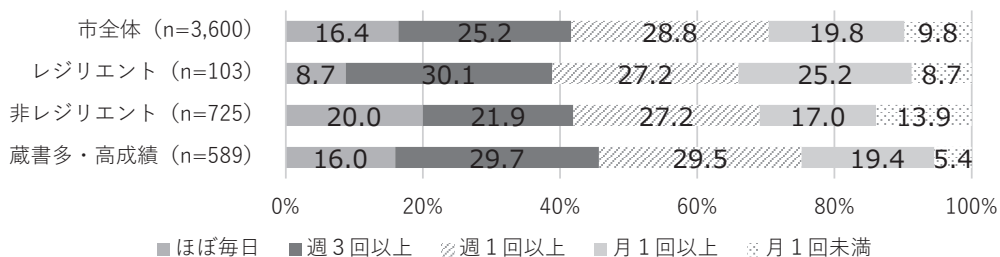
図表5-21 (中3) レジリエンスと「土日学習時間」のクロス集計 \*\*\*



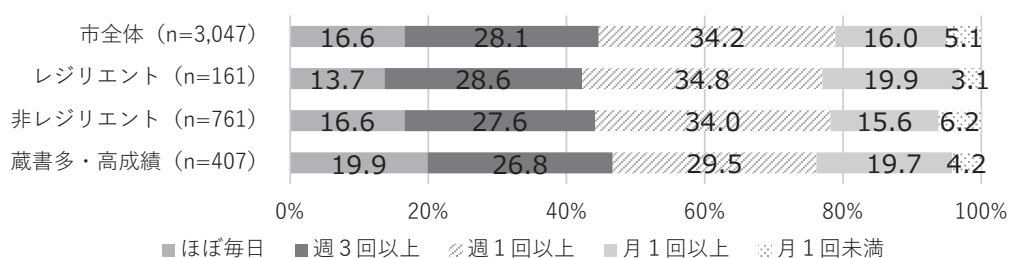
図表5-22 (小6) レジリエンスと「学習塾や家庭教師の先生に教わっていますか」のクロス集計 \*\*\*



図表5-23 (中3) レジリエンスと「学習塾や家庭教師の先生に教わっていますか」のクロス集計 \*\*\*



図表5-24 (小6) レジリエンスと「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」のクロス集計 \*\*\*



図表5-25 (中3) レジリエンスと「2年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」のクロス集計

## 6. 授業での工夫

続いて、比較の最後の項目として、授業での工夫について取り上げる。ここでは、レジリエントと非レジリエントとの間で回答割合に差のある項目が多く、レジリエントな児童生徒の特徴をよく示していることから、不利の克服についても示唆するところが多いと考えられる。

ここでの設問は、小学校では5年生まで、中学校では2年生までに受けた授業について児童生徒に尋ねたものである。まず「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」という設問に関しては、「発表していた」を選択する割合が小6、中3のいずれにおいてもレジリエントが非レジリエントを大きく上回っている（図表5-26・5-27）。

「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」という設問に対して「当てはまる」を選んだ割合（図表5-28・5-29）、また「授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」という設問に対して「当てはまる」を選んだ割合（図表5-30・5-31）についても、小6、中3の両方において大きな差が出ている。これらの項目は「主体的・対話的で深い学び」という授業方法に関するものであり、学習の主体性に関してレジリエントな層と非レジリエントな層で大きな違いがあると読み取

れる。

次に、図表5-32・5-33に示した「授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた」という設問についても「当てはまる」と答える割合がレジリエントが非レジリエントを大きく上回っている。この問いに関しては、レジリエントの「当てはまる」の割合が小6では「蔵書多・高成績」層と同じ水準にあり、中3では上回っている。レジリエントな児童生徒の多くが学校の授業とよく適合し、自身の学びに有効につなげているのではないかと考えられる。これについては図表5-34に過去3年間の傾向をまとめた。「当てはまる」と「やや当てはまる」の合計であるが、レジリエントのポイントが一貫して高い。

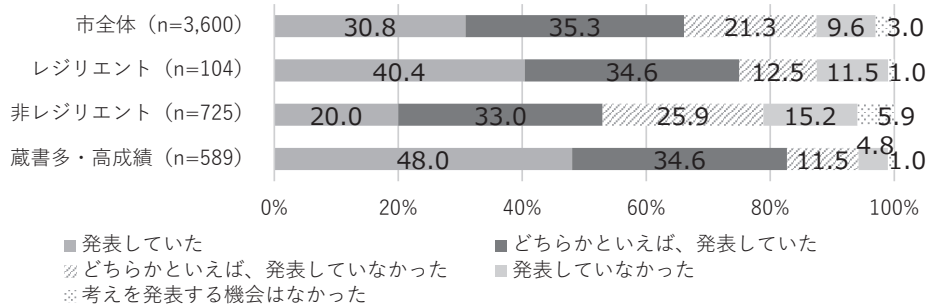
また「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」といった「主体的・対話的で深い学び」に関する設問でも同様の傾向でレジリエントが非レジリエントを上回っている（図表5-35・5-36）。

さらに、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」という設問については小6・中3ともにレジリエントが非レジリエントを上回り、その差も大きい（図表5-37・5-38）。これについても経年変化を図表5-39にまとめたが、小6・中3ともに一貫してレジリエントが非レジリエントを上回ってい

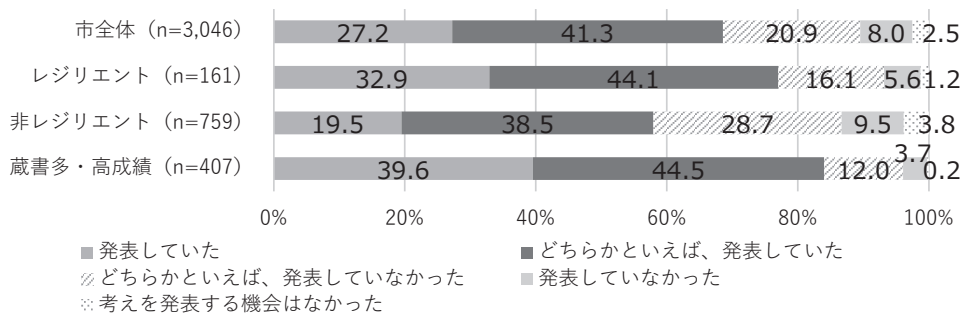
## 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)

る。また「授業で学んだことを、ほかの学習でも生かしている」という応用に関する設問につ

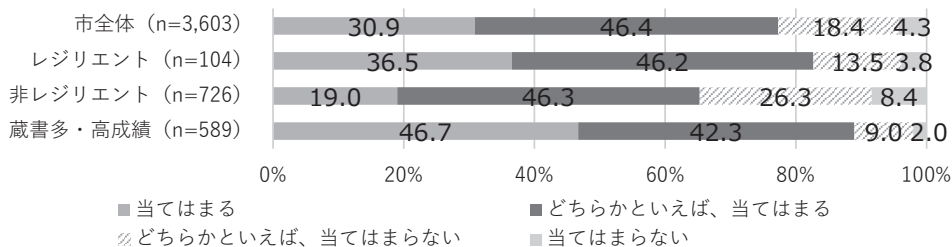
いても以上の設問と同様な結果が得られている(図表5-40・5-41)。



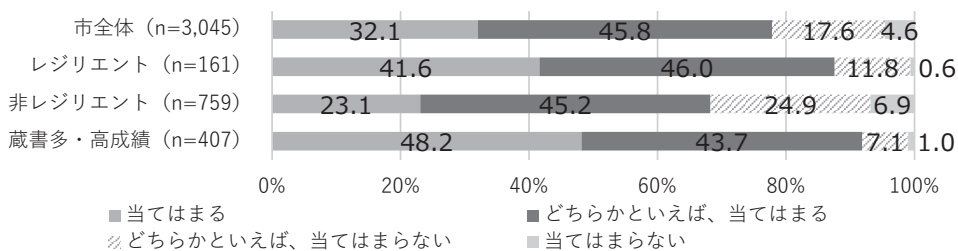
図表5-26 (小6) レジリエンスと「自分の考えが伝わるよう工夫して発表」のクロス集計 \*\*\*



図表5-27 (中3) レジリエンスと「自分の考えが伝わるよう工夫して発表」のクロス集計 \*\*\*

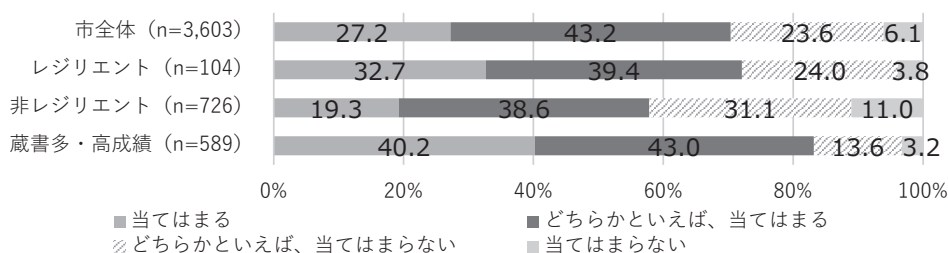


図表5-28 (小6) レジリエンスと「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」のクロス集計 \*\*\*

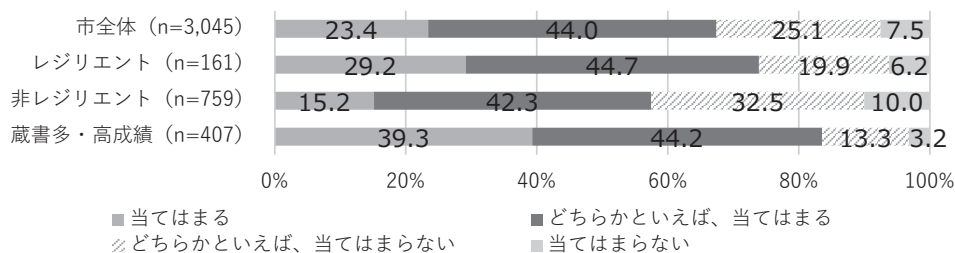


図表5-29 (中3) レジリエンスと「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」のクロス集計 \*\*\*

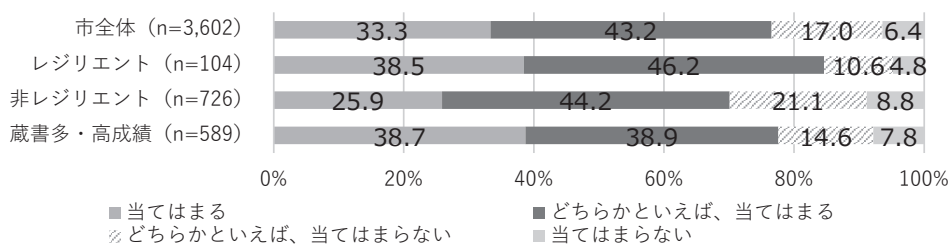
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



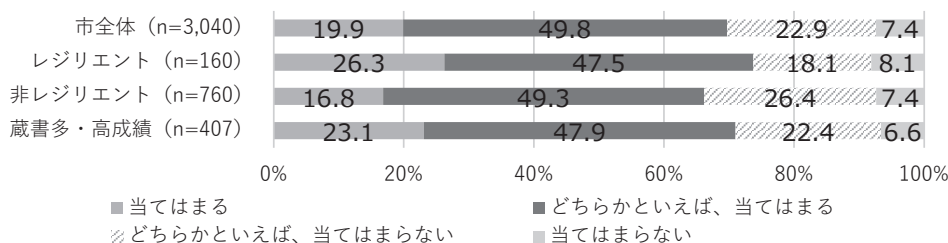
図表5-30 (小6) レジリエンスと「授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」のクロス集計\*\*\*



図表5-31 (中3) レジリエンスと「授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」のクロス集計\*\*\*

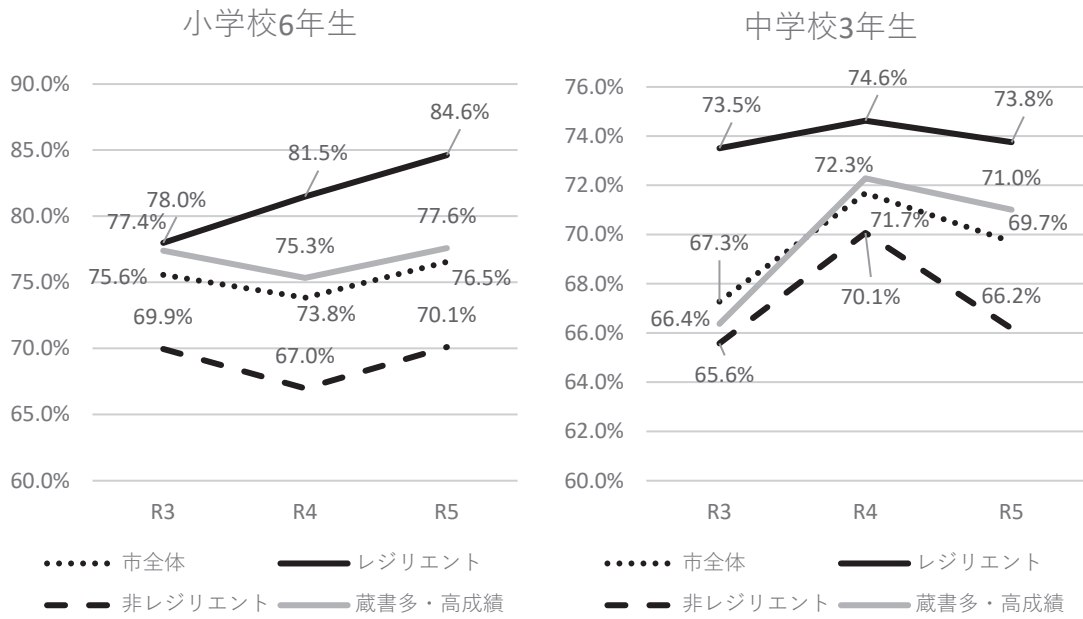


図表5-32 (小6) レジリエンスと「授業は、自分にあつた教え方、教材、学習時間などになっていた」のクロス集計\*\*\*

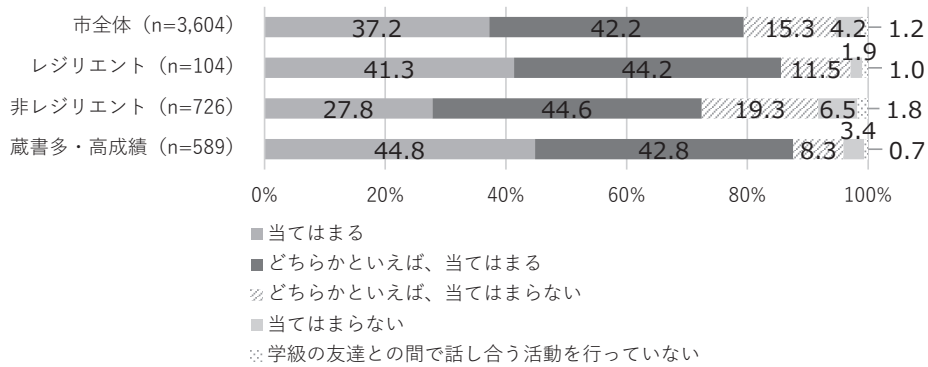


図表5-33 (中3) レジリエンスと「授業は、自分にあつた教え方、教材、学習時間などになっていた」のクロス集計+

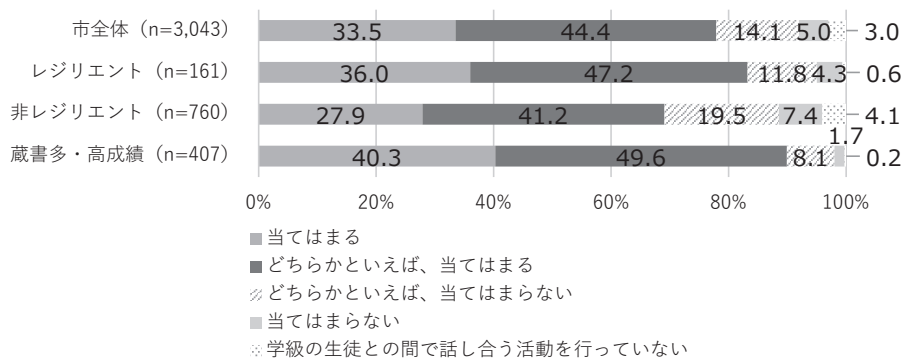
第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)



図表 5-34 「授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた」：「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計の経年変化

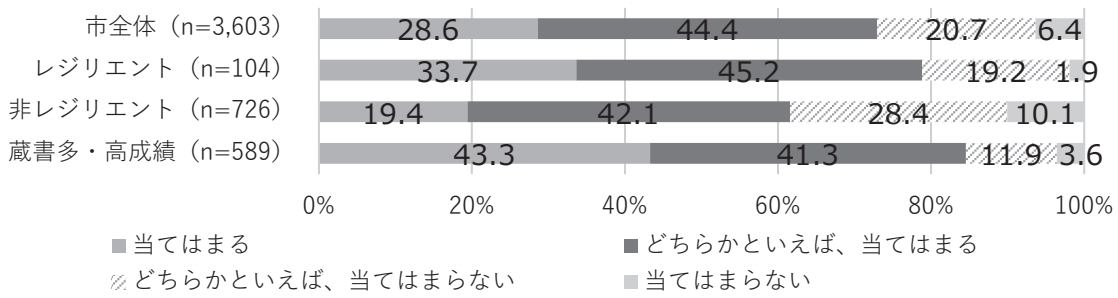


図表 5-35 (小6) レジリエンスと「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」のクロス集計 \*\*\*

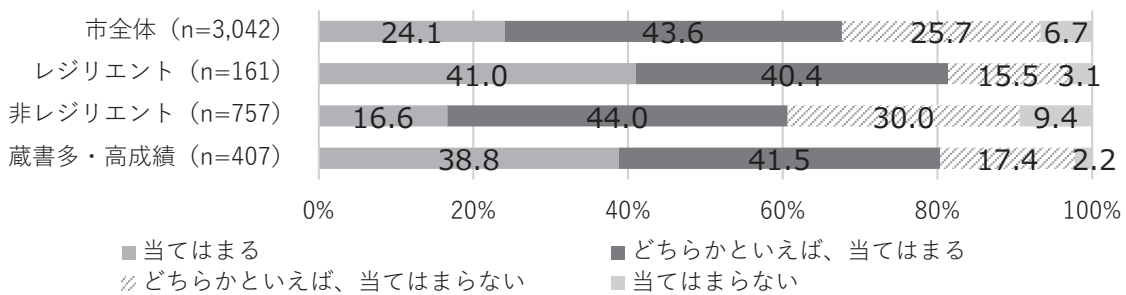


図表 5-36 (中3) レジリエンスと「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」のクロス集計 \*\*\*

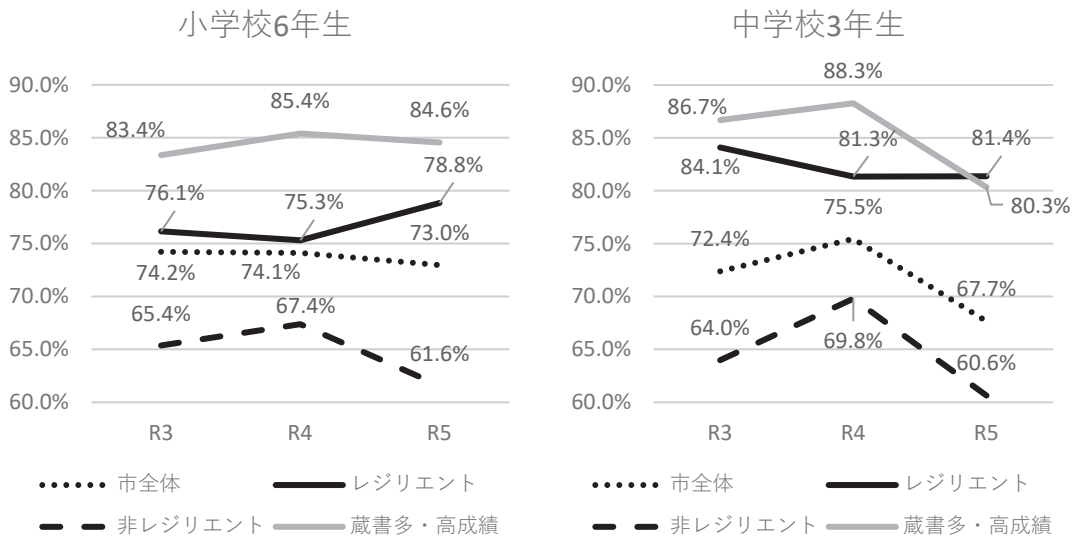
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表5-37 (小6) レジリエンスと「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができる」のクロス集計\*\*\*



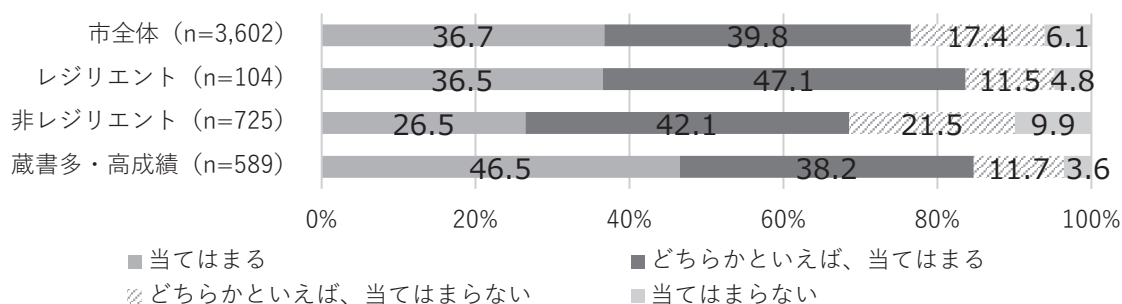
図表5-38 (中3) レジリエンスと「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができる」のクロス集計\*\*\*



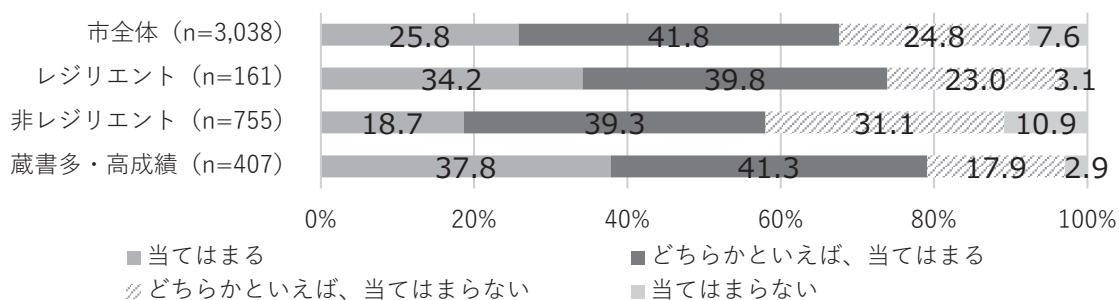
図表5-39 「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができる」：「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計の経年変化



## 第5章 全国学力・学習状況調査データの分析 (3)



図表5-40 (小6) レギュリエントと「授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている」のクロス集計 \*\*\*



図表5-41 (中3) レギュリエントと「授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている」のクロス集計 \*\*\*

## 7. まとめ

以上、全国学力・学習状況調査における質問紙調査の結果から不利を克服している児童生徒の特徴を見てきた。総じてレギュリエントな層は、非レギュリエントな層に比べて各設問に対して肯定的回答の割合が高いわけであるが、その中でも特に顕著であるのは、学習状況における「計画性」と授業での工夫における「分かった点分からなかった点の見直し」である。非レギュリエントな層にも、これらの点が高まっていくようにどのように支援していけるかが、学力格差の緩和に向けた一つのポイントとなると考えられる。

また、文部科学省(2023)にもあるように、授業での工夫で見られた「主体的・対話的で深

い学び」の取り組みに関連した設問で肯定的回答を示す児童生徒は、SESが厳しい場合でも、同じSESを有する層の中で学力調査の平均正答率が高い。このような主体的・対話的で深い学びをどのように非レギュリエントな層にも浸透させていくかも重要な点であろう。

### 【参考文献】

- 浜野隆, 2021, 「学力格差への処方箋」に向けて」耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編『学力格差への処方箋——[分析]全国学力・学習状況調査』勁草書房:1-8.
- 文部科学省, 2023, 「令和5年度全国学力・学習状況調査の結果(概要)」<https://www.nier.go.jp/23chousakekka houkoku/report/data/23summary.pdf>, 2024年1月25日閲覧).
- 山田哲也, 2021, 「不利な環境を克服している児童生徒の特徴」耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編『学力格差への処方箋——[分析]全国学力・学習状況調査』勁草書房:92-125.